

吉屋信子
徳川の夫人たち
下

朝日文庫



徳川の夫人たち（下）

朝日文庫

1979年3月20日 第1刷発行

1990年7月20日 第10刷発行

著 者 吉屋信子

発行者 木下秀男

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

©CHIYO YOSHIYA 1979 Printed in Japan

0193-260192-0042

定価はカバーに表示してあります

徳川の夫人たち

(下)

吉屋信子

朝日文庫

徳川の夫人たち
(下)

自偽者他偽者

中の丸御殿の桂木が、大奥御広敷にまた現れたのは、十二月に入って、まもなくだった。

彼女がいかに恐縮しきったように述べたのは、御台所がお万の方に折り入って頼みたいことが生じたので、ぜひ中の丸まで近日のうちに運び願いたい、という口上だった。

その年末にはお万の方は、大奥への諸大名の歳暮のお初穂を御台所へ献^{みだし}げに、今年こそ天下晴れて大奥代表として、持参する心づもりだったが、その時機よりはるかに早く、ふたたび御台所を訪れることとなった。

こんどは藤尾に前もって知らせると、彼女は非番（御年寄休日）の日に当るゆえ、お供したいと願った。いずれは御台所にお目見えさせるつもりなので、お万の方は侍女のほかに彼女を伴って、中の丸に向かった。

冬あたたかに晴れた日だった。中の丸御殿に近づく、と、笛の音がひびく。

「おや、どなたが横笛を……」

藤尾は耳を澄した。

「信平さまでしょう」

肺活量ゆたかに鳴るその音色は、あの若い公達ならではと思う。

お万の方の二度目の訪問に、御台所も桂木も、さらに親しさを示す。藤尾は大奥御年寄として初お目見えだったが、かつてお万の方のお介添だったことを、じぶんで誇って申し述べた。

そのあとは、御台所とお万の方と桂木だけで、お人払いの座となった。

「大奥取締のお役柄のおいそがしいなかを、折り入ってお招きいたしたのは、ほかでもない、あの信平のこと。この姉の手に負えず困って居ります」

まっさきに御台所孝子に言われて、お万の方は驚かされた。先日の初対面の印象も、まことに好ましく、大学寮出身の秀才そのものの感じだった。家光からも彼女に「鷹司の子息は行末たのもしいな」と告げられて、お召し出しをすすめたかいありと喜んでいたところに、その貴公子について何事が困った問題が起きたとは――。

その疑問を、桂木が要領よく説き明かした。

「信平さま、御本丸への御出仕を日ごとにお気の進まぬ御様子で、昨日も今日も客殿にお引き籠りにて、時折笛をお手になさるだけにて、ほとほと御台さまも、なんとしたことかと、お心を痛められて、さまざまお訓しになられても、御舎弟さま、さながら無言の行にて……」

お万の方にも、やっと事情が、のみこめた。

「それで、わたくしに、御用とは？」

「さればでございます。この上はお方さまにお願いして、信平さまにゆえに、さほど御出仕をおいといなさるのか、お聞き出し下されたく、御迷惑とは存じながら……御舎弟氏豊さまは、あのようにお元気にて御勤務遊ばすのも、これひとえに御姉君の御教示よろしきためと思われま

ゆえ、なにとぞ信平さまにも、おさとし戴けましたらと……」

むつかしい頼みごととて桂木もしどもどろである。

いつのまにか、笛の音はやんでいた。

思いもかけぬ困難な大役が、いま、わが身にふりかかって、さすがにお万の方も途方に暮れた。

「桂木の申すよう、なにとぞ、この頼みごと聞き入れてたもらぬか」

御台所も、重ねて言葉を添えられる。

「御姉君の御台さまのお手にあまることが、どうして、わたくしに出来ないでしょう」

お万の方は恐れをなしてしまう。

「姉君とは申せ、あまりに年齢のひらきもあり、あの若さの信平の心は、いかにしても、はかりかねます」

たしかに、この御台所には、それは不可能だった。それゆえに桂木は思いあまってお万の方へ、白羽の矢を立てたのであろう。

「お方さまは、信平さまとは僅かに二つちがい。ことに御舎弟氏豊さまもおありのこととて、あしたお年ごろのお気持は、おわかりになりましたしょう……」

桂木はそう信じ切っている。

御台所からは頼まれ、桂木からはすがられ、お万の方は、ここに進退きわまる。

「信平さまのお気持をお伺いした上にて、僭越ながら、わたくしの意見を申しあげる御無礼を、

おゆるし下さいませうか」

こう言うお万の方は、その時やっと引き受ける決心を、さだめたのだった。

「御意見はもとより、なにとぞ信平さまに御諫言^{かんげん}を。御台さまも、それを、おのぞみでございましょう」

桂木の言葉に、御台所も、うなずかれて、

「信平に御遠慮は無用のこと」

と言い添える。

「身のほどもわきまえぬ僭越のこと、おゆるし戴きましても、お役に立つかどうかは、おぼつかなく存じますが、ともあれ……」

「それではお引き受け下さいますか。なにとぞ、よろしくお願い致します。さっそくながら、信平さまにお会い下さいませ」

桂木はひと安心の表情で、お万の方を客殿に案内に立った。

さきの日初めて会ったばかりの信平に、今日は、こうした重い役目を負ってお万の方は、非常な決意で客殿に向かった。信平のお召し出しを進言した立場からも、その信平が江戸城出仕を早くも、うとむ気分となって引きこもり、笛ばかり吹き鳴らされては、彼女自身も家光將軍への責任も感じる。

渡り廊下でつながれた客殿の入口の杉戸二枚に、豪華な花車の描かれたのを桂木が開いて、奥へ導かれた座敷に、信平は鬱然と思い屈したように、机によりかかっていた。すでに月代青^{きかやき}き青

年武士の羽織袴の姿だった。傍の書棚には、おびただしい蔵書のなかに、お万の方の眼に、いち早く映じたのは「皇宗事宝類苑」の帙入り十五冊の積み重ねである。後水尾天皇勅版の限定版で、非常に貴重な書籍だった。

お万の方は、じぶんの学問の素養などは、信平の学力の足もとにも及ばぬと、思い知らされた気がした。

桂木にみちびかれたお万の方が忽然と現れたのに、信平は驚かされて眼を見張る。

「さきほど、御台さまの御機嫌伺いにあがりましたので、こちらへも御あいさつに参じました」
お万の方は手について言う。

あざやかな意匠のおかいどり。伽羅きやらの薰り、天与の美貌に智恵の溢れる双眸、この冬の日も、このひとの姿からは、うらかな春の気配立ちのぼる感じだった。

「信平さまも本日は御出仕なく、お退屈と存じますゆえ、お方さま、ゆるりとお話相手を遊ばされませ」

桂木は、そ知らぬふりで、当りさわりのない言葉を添えたまま、次の間に引込んでしまう。
「御病気とも見えませぬに、なぜ御出仕なされませぬ。表御殿の御勤務は、お気に召さぬのでございましょうか」

「……………」

この沈黙戦術は覚悟の上のお万の方は、ひるまぬ。

「江戸城表御殿は侍の世界、女子供のあずかり知らぬことと、お思いでございますか」
美しい切れ長の眼に見詰められて、信平青年は降参した。

「いえ、なにも、そういう無礼な考えは持ちませぬ」

「それなら、お話し下さりませ。このわたくしも十七の折に比丘尼^{びくに}として伊勢より下り、思いもかけず、そのまま大奥に召された時の切ない苦しみは、男の信平さまにも、わかって戴けると存じます。それ以来わたくしは人間の受ける苦しみ、悩みが、わがことのように、わかる身となつたように思われます」

このひとの真剣な言葉の果てに、その双眸はうすく涙をふくむのを、信平は見逃がさなかった。六条家の息女、十七歳の慶光院七世院主紫衣の尼君還俗強制の苦杯を涙と共に飲みほして大奥へ、現在は將軍第一の寵妾にして大奥総取締……かつての嘆きの運命を逆手にとって生き抜くと見えるそのひとの胸深く、いまでも沈澱する憂愁のかげを、いま、そのほのかに浮べる涙を、信平はしかと認めた刹那^{せつな}、この女性の心魂の強さにくらべて、わが精神のもろい弱さを恥じ入った。

「姉上や桂木を悩ませたあげくに、あなたをまで煩わしたとは、この信平面目次第もなし。おわびいたす」

彼は頭をふかくさげて、お万の方を、あわてさせる。

「そうした御遠慮深いおわび言を、伺いに参ったものではございませぬ。信平さまの、いまのお苦しみをおもらし戴けませぬか。表御殿での御勤務は有職故実を御指南の高家職、公家御出身にふさわしく、なんのお悩みもないはずと存ぜられますに、それとも、ほかにお気の進まぬことが

……御存じの弟戸田氏豊は、かねてより武士を志願、剣道、馬術を好みましたが、信平さまは、ひたすら学問のみ。にわかに変る江戸城にては、いかがでございましょう」

まごころと優しさの限りをこめて問われると、信平も、孤独の貝殻のように、いつまで口を閉じてはいられなかった。

「——図書寮の国史修撰の生活から一転、江戸に下って將軍に仕える武士となる変化は、お方さまのかつての御還俗のお苦しみにくらべれば、さしたることもなかりうと思われましようが、生涯を学問に埋らせて悔なしと思ひさだめたこの身には、学究への未練が断ち切れぬ思いでした」

お万の方は、うなだれて聞き入る。わが弟とはちがう個性のこのひとを、江戸城へお召し出しを願ったのは「あやまち」だったかと、いまさらに悔いても、もはや、せん方なかった。

「さりながら、父の喜びは申すまでもなく、母も、おさびしき姉君のお力にもなれよと、しきりと、すすめるままに心さだめて参りしからには、武士のたしなみの剣道も乗馬のけいこも、不得手ながら甘んじて修めます。しかし城内のあの徳川家臣団のかもしれない出ず卑俗きわまる境地に身を置くのは、いかにしても、たえられませぬ」

信平は**眦**^{まなじり}を決して強く言い放つ。お万の方は胸を打たれた。

これは一大事である。これでは禄高二千石の特典を受ける青年武士の前途は暗澹^{あんたん}としている。お万の方は、しばらく言葉もなかった。けれども彼女の頭脳は急速度に回転していた。

「女のわたくしさえ、伊勢から、はるばる江戸城まで継目御礼に下ることだに心にそまぬ思いでございました。京の禁裏にこそ御礼に参内のはずと……、そのわたくしが、思いもかけぬ運命の

齒車に巻き込まれて大奥に召されて、この年月のうちに、やがて知りましたのは「力ちから即善すなわちぜん」のまことの理ことわりでございます。力ある者は「善」も「正義」も行えます。力なき者には常に愚かな涙が与えられるだけということを、わたくしは学びました」

静かな気品のこもるこの声のひびきを、信平は耳にしみ入るように聞き入る。

「おそれ多いことながら、京の朝廷も、それにつらなる公卿も、生れながらに備わる貴族の素姓と古い文化を守られるのみで、いつしか世をおさめる実力は武門の握るところとなるにつけて、その武門の勢力を利用されて、いにしえより平家強ければ平氏に、源氏強まれば平家を見棄て、朝改暮変を恥じられぬうちに……次から次へ新興のはつらつとした武家の実力者が、天下をおさめるならわしとなるのも道理。徳川幕府を建設した武士群のたくましい行動力と新しい政体創造への努力の前に、公卿の優柔不断の非力を反省もされずに、いたずらに氏素姓と位階と文化は、武士よりはるかに上位と誇っても、国家統治の力なき一群に何が出来ましょう」

この優雅な姿の麗人の紅唇から放たれるこれほどの激しい言葉の前に、信平は圧倒される。それは六条家の息女が、將軍に侍して幾多の心の曲折をたどった果ての、人生に対する鋭く、ゆたかな直感の生んだ言葉だった。

「武士とはいえ、いまは平和な太平の御代、剣に代って学問と知能の政治力の求められるこの時代に、信平さま、力ある者のみ行い得る「善」と「正義」の実行者におなり下さりませ。それは徳川家のためより、天下万民のためにとお考えになりませぬか」

信平は呆然として、お万の方の前に全身を緊張させた。これほどの女性を侍妾として溺愛する

將軍家光は、單なる好色家にあらず、非凡な英雄ではないかと、信平の認識を揺がせた。

「信平さまは、さきほど城中の家臣たちの卑俗きわまるのは堪えられぬと仰せられました。あの武士たちは、公卿たちの色白の顔に引き眉の優雅な顔や古風な言葉のやわらかいつくり声は持ちませぬ。その代り、いざ戦場へとなれば、真先に主君のために討死をほまれと信じ、わずかの過失の責めにも、いさぎよく、腹一文字に掻き切る覚悟で、日々勤務される人々。たとえ粗野でも無風流なぶこつ者でも、男のいのちをかけて武士の名に生きていられるのを、よく御觀察下されば、公卿たちの古い伝統には見出せない、正直いちずの純粹な武士道觀念が、みずみずしく溢れた男らしい境地が、おわかりになりました。武士になんの美点もなくて、どうして国家を統治出来ましょう」

今まで素直に聞き入った信平が、ここで初めて異議を唱えた。

「お方さまは女人のみの大奥にて、最高の権威者將軍に接せられるのみ。さりながら表御殿に多数ひしめく勤務の武士たちは、必ずしも武士道の権化ごんげのみとは申せぬやからもおり、上役への阿諛あしん迎合ごうごうと同時に、われら新参者を白眼視する俗臭堪えがたきを覚えます」

ここで初めて、現時点における信平青年の心境を知り得て、彼女は優しい微笑を示した。

「武士とて人間、金鉄ではございませぬ。階級觀念のきびしいそのなかでは、上役には絶対服従の掟でございます。それが阿諛あしんとも迎合ともなりましょう。城中に仕えるはおよそ父祖以来の譜代の家臣やその子孫。太平の御代に戦功も立てられず、昇進の道もなき折、御台さま御舎弟鷹司家の御子息ゆえに一躍二千石拝領は、槍一筋を力に仕える家臣たちには、いかばかり、うらやま

しいか、お察しなさらねばなりません」

弟氏豊には姉の縁故以外に、徳川三代の老臣戸田氏鉄うでかねの後見がある。当人も、武士の世界に入ったのを喜悅する周囲との親和力が備わる単純な性格だ。けれども鷹司信平の気質には、武人勢力の下にあるをいさぎよしとせぬ、公家の文化人意識が、その学才を裏付けにして強烈である。だが、なんの実績もなく、いきなり二千石拝領の彼を、徳川譜代の家臣たちが冷い眼で見るのは、当然の人情であった。その上この新参高家の貴公子は、周囲の彼等を野蛮視して昂然とかまえるからには、殿中での風当りの強さが、お万の方にも想像がつく。

「信平さま、それをよく御承知の上で、殿中の人々へ、こちらからお親しみになり、堂上家の学問を、徳川の政治面にも役立てる道をお開きになっては下されませぬか」

公家の温室育ちの秀才青年は、この時、じぶんの盲点を、お万の方に、しなやかに鋭く、えぐり出された気がした。

御台所孝子はお万の方に、あのような難問題の頼み事をして、客殿の信平のもとへ桂木に案内させてから、だいぶ時がたつにつれ、気になった。

どこか気むつかしいところのある信平が、御台所の弟として、侍妾のお万の方から忠告を受けるのを不愉快に感じて、彼女を侮辱するような態度に出て、陰悪な状態ともなれば、その結果は直ちに家光に影響を及ぼして、せっかく江戸城へ出仕となった信平は不首尾となる。こうして姉弟ともに將軍から、うとんじられる運命に陥る……、御台所は不安な気持だった。

その彼女の前にお万の方が、桂木を従えて、客殿から戻った。

「信平さま、明日より御機嫌よく御出仕なされますゆえ、御安堵下されませ」

と、告げられた時、御台所は心からホッとされて、言葉もなかった。

「御台さま、これみな、ひとえにお方さまのお力によりますこと。この桂木お次に控えて、もれ伺いました」

彼女は、お万の方のみごとな説得力に驚嘆した。

「まことに、かたじけのう思います」

御台所は、せいっぱいの言葉に、感謝をこめる。

「御台さま。この信平さまの大事な笛一管、しばらくお手もとにお預かり下さいませ」

古代裂こたいぎれの袋におさまった笛を、お万の方は御台所の前に置いた。

さきほど信平の机辺にあった笛を、お万の方は「城中御勤務にしかとお馴れ遊ばすまでは、この笛のお遊びはお見合せ下さりませ」と言っ取り上げてしまったのを、信平は、さからいもせず^ににいた。それほど十八歳の眉目清秀の貴公子は、お万の方に全身呪縛されたように、彼女の意に、すべて従わされてしまった。

こうして、彼女自身も危ぶんだ大任を首尾よく果して、桂木に見送られて、藤尾や侍女と共に大奥への帰りを急いだ。年末が、おいおい近づくにつけ、取締役は、身辺多忙である。

——信平は、みごとにお万の方に説き伏せられて、翌日から出仕を怠らぬ。その三日後の當中